

仏教企画通信

62号

発行日 | 令和3年1月1日

発行所 | 有限会社 仏教企画
〒252-0116
神奈川県相模原市緑区城山4-2-5
Tel. 042-703-8641
Fax. 042-782-5117

発行人 | 有限会社 仏教企画代表 藤木隆宣
Email | fujiki@water.ocn.ne.jp

村祭りの思い出

駒澤大学名誉教授

佐々木宏幹

この歌が作られたのは明治四十五年(一九二二)であるとされるから、もう一〇八年も前のことである。私がこの「村祭」の軽快で躍動的な歌を耳にしたのは、多分小学校に入ってからであろうから、年齢は七、八歳か。

一 村の鎮守の神様の
今日ほめでたい御祭日
ドンドンヒヤララ ドン
ヒヤララ
ドンドンヒヤララ ドン
ヒヤララ
朝から聞こえる笛太鼓

二 今年も豊年豊作で
村は総出の大祭
ドンドンヒヤララ ドン
ヒヤララ
ドンドンヒヤララ ドン
ヒヤララ
夜まで賑わう宮の森

鎮守とは

鎮守は鎮主とも書く。その地を鎮め守る神である。この神の祭りを歌ったのがよく知られる「村祭」であろう。

一 村の鎮守の神様の

今日ほめでたい御祭日
ドンドンヒヤララ ドン
ヒヤララ
ドンドンヒヤララ ドン
ヒヤララ
朝から聞こえる笛太鼓

二 今年も豊年豊作で
村は総出の大祭
ドンドンヒヤララ ドン
ヒヤララ
ドンドンヒヤララ ドン
ヒヤララ
夜まで賑わう宮の森

季節はひんやりと秋を感じさせる頃であった。時代は昭和十二、三年。当時の大人たちの服装は着物と背広(洋服)が半々であったが、近くに住んでいた七十代ぐらいのS爺さんは、日露戦争で手柄を立てたというので、功七級金鷄勲章を授与された人で、村では有名人であった。S爺さんは金鷄勲章と従軍勲章を着物の左胸に下げて、悠然と祭りに現れるのが常だった。

村祭りには村の大勢の人たちが集まったが、支那事変(日中戦争)が始まった頃とあって、金鷄勲章を胸にしたS爺さんはモテモテであった。村の鎮守は「村社八幡神社」であり、村の中では最も格の高い神社であった。神社の参道の両側にはいろいろな屋台が並んでいて、さまざまな物を売っていた。八幡神とはどういう神であろうか。

いろいろな説があり特定は困難らしい。海神、鍛冶神、ヤハタ(地名)神、幡を立てて祀る神、秦氏の氏神、焼畑神などと言われている。ところが八幡宮神事の祭祀集団は、豊前国(現在の福岡県東部)の田川・京都などの集団と南部の宇佐・下毛などの集団により構成されていた。したがって祭祀の中心は豊前国綾幡郷あたりにあり、ここに「ヤハタ神」の名が発生したのかもしれないとされている。

この信仰はやがて宇佐地方に伝播し、宇佐の比咩神を祀る信仰と融合した。この間にこの祭祀集団の司



祭者は、雄略朝(四五七~四七九)には豊国奇巫、用明期(五八五~五八七)には豊国法師として天皇の治病に参内したという。欽明朝(五三九~五七二)の頃に大神比義なる巫者(シャーマン)が宇佐に入り、ヤハタ神に応神天皇の神格を与えようとした。

八幡神として中央進出を企てたのは聖武天皇(七二四~七四九)が東大寺の地で大仏の造立を発願した頃で、当時の司祭者大神氏は進んで朝廷に接近し、八幡神の託宣により大仏造立に伴う数々の問題が解決した。天平勝宝一年(七四九)東大寺ができるのと八幡神の地位と力が高まり、国家の大事に関わった。とくに弓削道鏡の野望を託宣により

退けてからは、天応一年(七八二)護国靈験威力神通大菩薩の神号が贈られ、「神仏習合」の先駆となった。最澄や空海が八幡信仰に近づき、寺院鎮守として盛んに勧請したので、宇佐では神功皇后(第十四代仲哀天皇の皇后)を配祀した。最澄はとくに深く崇敬したので天台僧に親しまれ、延暦寺の僧金亀は天長四年(八二七)豊後国(現在の大分県南部)に由原宮を勧請し、「宮寺」という新しい信仰形態を造った。この影響により大安寺僧行教によって貞観一年(八五九)、八幡神は山城国(現在の京都府中・南部)男山に勧請され、翌年石清水八幡宮が建立された。その頃から応神天皇、神功皇后の神格が重視さ

れ、王城鎮護の神として崇められ、伊勢神宮につぐ第二の宗廟として崇敬されるにいたった。

その後、源頼信など清和源氏が八幡神を氏神とし、八幡神社は関東や東北地方まで伝播するに至った。鎌倉幕府が開かれると鶴岡八幡宮が武士たちにより信仰され、八幡大菩薩への信仰は日本全国に伝播し武神としての性格が強まった。現在八幡宮に関係する神社は全国に四万余社あるという。

実は私が育った寺にも八幡神社がある。この神社が建てられたのは私が小学校の一年生のときであるから、昭和十二年(一九三七)であり、日中戦争(支那事変)が勃発した年

今回が「大悲心陀羅尼」の最終回である。これまで大悲呪について検討してきたが、最後に大悲呪についての前提をまとめておきたい。そもそも大悲呪には広本と抄本の二種がある。広本は『ニラカオンタ・ダーラニー』(Nīlakanṭha-dhāraṇī 青頸陀羅尼)、『ニラカオンタ・フリダヤ』(Nīlakanṭha-hṛdaya 青頸心真言)というサンスクリットテキストがあるが、これは完全に青頸観音についての教本である。一方、ここで扱ったのは伽梵達摩訳『千手千眼観自在菩薩広大門満無礙大悲心陀羅尼經』(略称『千手経』)中に説かれる抄本であり、この陀羅尼呪こそが東アジアで流通したものである。しかし、これにはサンスクリットテキストが存在していないし、その音訳には誤りも多い。そこで抄本の不空訳や広本のテキスト類を参考にしながら大悲呪の解説を試みたわけである。以下、最後の解説に移ろう。



東洋大学文学部教授
渡辺章悟

『千手千眼観世音菩薩廣大圓滿無礙大悲心陀羅尼經』
「唐西天竺沙門伽梵達摩譯」
廣大圓滿無礙大悲心陀羅尼神妙章句陀羅尼

	和訳	語句の註解
悉陀夜 娑婆訶	成就した者に スヴァーハー!	「しどやー」は、「成就する、達成する」を意味する動詞√sidhの過去分詞siddhaの与格(シッダーヤsiddhaya)で、「成就した者に」。「そもこー」(娑婆訶)はスヴァーハー(svāhā)「幸いあれ!」
摩訶悉陀夜 娑婆訶	偉大なる成就者に スヴァーハー!	「もこ」(摩訶)は、「偉大な」を意味する形容詞。「しどやー」(悉陀夜)は、シッダ(siddha成就者)の与格「シッダーヤ」(siddhaya)で「偉大なる成就者に」。スヴァーハー(svāhā)「幸いあれ!」。春日版、敦煌写本系では欠。高麗藏系では、前の句との文節がない。
悉陀喩藝 室囉囉耶。娑婆訶	ヨーガ行法に自在なるものに スヴァーハー!	「しどゆーきー」(悉陀喩藝)と「しふらーやー」(室囉囉耶)と区切って読むが、正しくは不空訳(No.1111B)「悉駄喩濕囉囉也」のように、シッダ・ヨーゲーシュヴァラーヤ(siddha-yogeshvarāya)で、「ヨーガ行法に自在なるものに」の意味。ヨーゲシュヴァラ(自在神)は一般的にはシヴァ神のことであるが、ここでは観自在菩薩を指す。なお、春日版、敦煌写本系、高麗藏系では「室囉囉耶」を「室囉囉」とする。
那囉謹墀 娑婆訶	青頸[観音]に スヴァーハー!	「のらきんじー」(那囉謹墀)は、ニラカオンタ(nīlakanṭha青頸)の呼称。ここでは不空注(No.1111)「頼羅寔姪引也」の与格(nīlakanṭhāya)をとる。

である。このときに祖父は近くの山の上にあつた小さな社殿に祀られていた背丈一メートルほどの八幡神の古ぼけた神像を修理して新築の堂に祀つたのである。八幡神が武神であることを知っていた祖父はこの神を奉祀して、軍に召集された檀信徒たちの武運長久を祈念したのと思われ。この八幡神は応神天皇である。この八幡神が詳しいことは分からなかった。すぐ近くにある村社八幡神社とはどういう付合をしたのかもはっきりしない。仏教のお寺が神道の八幡神を祀るのはおかしいではないかと意見する人はいなかった。一神教を信奉する国々ではとても考えられないことであるが、何しろこの国では八幡神は「護国靈験威力神通大菩薩」であり「神仏習合巨(神と仏が習合むあわさること)の実現はそう無理な事態ではなかつたと言えよう。

私小學校の同級生と一緒に、年に一度の「村は總出の大祭」に毎日通つた。私がよく知っている高等科の女性教師が割烹着を着て、大声で「芋の子汁のホヤホヤー」と叫んでいるのには驚いたものである。何しろ一億総力戦の時代である。この女性教師の行為を誉めこそすれ貶す人はいなかつたと思う。祭りには必ず神樂が行われたが、その主人公は素戔嗚尊であつた。この神は天照大神の弟であるが、凶暴のゆえに高天原から追放され出雲国(現在の島根県東部)で八岐大蛇を退治したという有名な神である。神樂の舞台に現れた素戔嗚尊は、いかつい顔の面を着けて、こう述べた。

祭り日本人

「おー吾こそは吾こそは素戔嗚尊なり。汝畏れ多くも朝廷の仰せに随はずよつて、汝を討てとの詔を被る。いざ尋常に勝負、勝負!」。結局相手は勝負に負けて退散するのであるが、素戔嗚尊が恰好よく忘れられず今でもその語りを憶えているのである。神樂の舞台は高さ二メートルほどか、四角が土色の布で覆われ、舞台の下が神樂の演者たちの控え所であつた。私は舞台の上で華々しく振舞つていた人たちは面を外したらどんな顔をしているのか知りたくて、舞台下の彼らの控え所に行つてみた。普通の農家のおじさんたちであり、舞台上の姿とあまりにも違つたのでガツカリしたのであつた。

にはこの意味をめぐつて忘れられない思い出がある。村社八幡神社の神主(神官とも言つていた)はなかなかの遣り手の人で、神殿の縁の下に特別な場所を作つて稲荷神を勧請して祀つていた。この神は五穀をつかさどる倉稲魂(うかのみたま)であり、狐はこの神の使いであるという俗信が民間には広く信奉されてい。稲荷神を祀つてある場所は頑丈な柵で囲まれており、外からは見えなかつた。そこには狐の神(稲荷神)がおり、油揚げが大好きだといつたので、人びとは神社に油揚げを持参した。その油揚げは稲荷神が食するので、次の日にはなくなつていくという噂が広がつてきた。私にはとても信じられないことであつた。

何とかなその場を目にしたと思つた私は、ある日社務所にカーテンがかかつて神主さんたちがいないことを突きとめてから、柵を潜つてドキドキしながら薄暗い稲荷神の居場所前まで這つていった。そこには大きな御幣があり、その前には油揚げが二枚、紙の上にあつた。私は十分に納得するとともに、自分のバチアタリな行動を怖れた。このことは友人にもひた隠しにした。知りたいことと畏れ多いこととのあいだで悩んだ。少し恰好よく表現すると、「知」と「信」の矛盾とならうか。後になって耳にした話では、稲荷神に供えられた大量の油揚げは、神社の氏子(信者)たちに配るといふことだつた。多分、氏子たちの家庭では

沢山の油揚げを使つて稲荷寿司を作り食したのであろう。ところで私が現在住んでいる横浜市西北部のある街のマンションの近くには、M神社という立派な神社があり、祭神は素戔嗚尊である。この地域は戦後に開発されたところで、戦前には大部分が農地であり農民が主な住民であつた。M神社は農民たちの氏神であつたらしい。ちなみに私が現在暮らしているマンションの土地もWさんという人の所有地であつた。Wさんはこの辺りに広大な畑地を持つていたらしく、あちこちにマンションを建て、東京方面から溢れだしてきた大勢のサラリーマンたちに住居を提供している。Wさんの今の自宅は元農家とは思えない豪邸である。WさんはM神社の氏子集団の役員であり、毎年秋に行われる祭りには御輿の先導役を務める。Wさんが先導する御輿が笛や太鼓の音と共にワツシヨイ、ワツシヨイと勢よく付いてくるのを目にする。この地へと引越した人たちは「秋」を実感するのである。私もその一人である。ところどころで「祭り」というと多くの人は「神社」を想起するのではなからうか。祭り⇨神道というのが多くの人々の常識になつていく観がある。では仏教に祭りはないのか。手近な例では釈尊の生誕を祝う祭りを「花祭り」と呼ぶが、ほかに何があるだろうか。「祭りあげ」(祭上げ)という言葉は、死者の最終年忌を指し、三十三回忌や五十回忌のことで、葉付きの塔婆を立て「まつりおさめ」とも呼ばれる。私もかつて「祭りあげ」に出たことがあるが、そこでは「弔い上げ」と呼んでいた。「問い上げ」とか「問い切り」とも言う。この営みを機に仏が神になるとか先祖になる、あるいは天にのぼるとする地域もある。こうして習俗の裏には神道と仏教の相関関係があるようだが、ここでは触れない。一般の人びとの見方では「神道⇨この世⇨生者」、「仏教⇨あの世⇨死者」となるよう。これが日本宗教の大枠と観られているのではなからうか。



正彦氏である。氏は「東日本大震災が生じたとき、被災者たちは粉雪の舞い落ちるなか、一列に並んで食糧トラックが来るのを待ち、トラックが来ても他国で見られたように我がちに殺到する者もなく肅々とおにぎり一つもらうと、深々とお辞儀をし、水をもらつた人はもたえなかつた人に半分分けていた。世界中がこれに驚愕した。今回の新型コロナウィルスに際しても三七度五分以上の熱が四日間続く場合には受診するという専門家会議の指針を忠実に守っているから、医療崩壊が起きずに死者数が抑えられている。」(藤原正彦著「どちらが恐い」文藝春秋「五月号」二〇二〇)と述べておられる。「何事もお互いさま」のだから協力し合おう」という精神は「村祭り」のときの村人たちのそれとよく重なるのではなからうか。村祭りは日本人の行動様式の基本を示しているとも言えよう。

「大悲心陀羅尼」は以上で終わるが、『千手千眼陀羅尼經』(千手經)では、さらに次のように描写している。

「觀世音菩薩がこの呪を説き終わると、大地が六種類に震動し、天の神々たちは宝玉の花を雨ふらせ、花卉は下にみだれ落ちた。十方の諸仏たちはみな歡喜し、欲界の最高位にある第六天(他化自在天)の魔王波旬や外道たちは恐怖で身の毛が逆立った。その会座に集ったすべてのものは、みな悟りの果報を得ることができた。あるものは、聖者の最初の位である須陀洹果(預流果)に、あるものは斯陀含果(二果)に、あるものは阿那含果(不還果)に、あるものは阿羅漢果、つまり声聞の四つの位(四沙門果)を得た。また、あるものは初地(歡喜地)から第十地(法雲地)にいたる菩薩の位(十地)を得ることができ、無量の生きとし生けるもの(衆生)は悟りを求める菩提心をおこした」という。

次いで、この会座にいた梵天王が「大悲心陀羅尼」の相貌(様相)について質問すると、觀世音菩薩は、大慈悲心、平等心、無為心、無染着心、空觀心、恭敬心、卑下心、無雜亂心、無見取心、無上菩提心という十種の様相を説き、この心構えによって大悲心陀羅尼を修行すべきことを宣説する。そこで大梵天王が本呪を受持し、忘れないことを誓う

大悲心陀羅尼と千手観音

この神呪を誦持するのに対する加護が説かれる。この大悲心陀羅尼の呪文を教え通りに唱えれば、日光菩薩・月光菩薩が多くの神仙とともにやってくる。その呪文の効果を増大させてくれる。さらに、觀世音菩薩も、この神呪を誦持する者たちを、千眼で照見し、千手で護持すると宣言する。

なお、『千手經』の分量からいうと、ここまでは全体の三分の一ほどで、この後も千手觀音菩薩の配下である護法神・二十八部衆、及びその眷属たちを使わして本陀羅尼の誦持者たちを擁護させ、あるいはその誦持の功德や効果、実際の誦誦法が説かれる。また、觀世音菩薩の来歴や四十八手といわれる千手觀音の形状などについて詳説されている。そのため、本經は千手觀音の所依の經典として流通してきたのである。

千手經の趣旨と大悲心陀羅尼

本稿の最初に述べたように、「大悲心陀羅尼(大悲呪)の正式名は「広大圓滿無礙大悲心陀羅尼」とい、伽梵達摩訳『千手千眼觀自在菩薩廣大圓滿無礙大悲心陀羅尼經』(大正No.100)に含まれる陀羅尼部分を抽出したものである。これまでの記述からわかるように、『千手經』の趣旨は〈大悲心陀羅尼の宣説〉であって、それを觀世音菩薩が「千手千眼」となって守護す

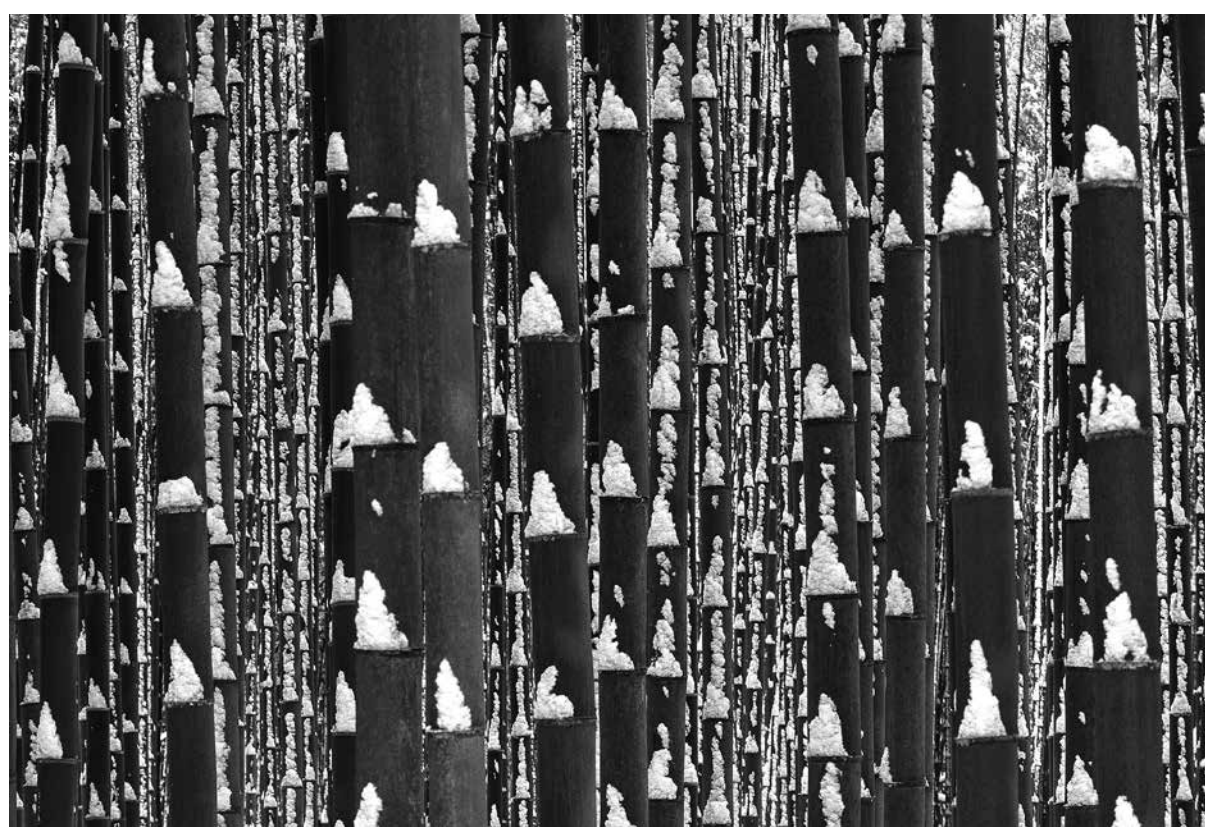
るといふものである。まさにこれが「千手千眼觀音菩薩廣大圓滿無礙大悲心陀羅尼經」という本經の正式名の所以なのである。

しかし、本經の解説でしばしば言及したように、『千手經』では千手千眼觀世音菩薩の陀羅尼を説くはずなのに、何度も「青頸よ」とあるように、實際の大悲心陀羅尼は青頸觀音の陀羅尼である。いつの頃かこのような混交が生じたのかは不明だが、少なくともここで述べた伽梵達摩訳『千手經』中の「大悲心陀羅尼」は青頸觀音の陀羅尼であることは間違いない。

この疑念はチベット語訳をみても深くなる。たとえばチベット大蔵經に収録されている、法成(chos gnyis)訳『千手經』(北京版 Vol.8, No.36)の前半は、抄本である伽梵達摩訳『千手經』からの重訳であるが、肝心な大悲呪のみは広本に置き換えられているからである。その理由は伽梵達摩訳の漢音写の正確さのため、広本の陀羅尼に置き換えたという事情があるのかもしれない。いずれにせよ、この広本の大悲心陀羅尼は千手觀音ではなく、青頸觀音の陀羅尼なのである。しかし、これまでその中身の神呪の検討が実際に行われることはなかった。それも陀羅尼という説法形式のなせるわざだったのであろう。

シヴァ神から青頸觀音へ

その成立もヒンドゥー教のシヴァ神と深い関連を持つ。特に有名な乳海攪拌神話に登場するシヴァ神は、猛毒(ハロー)を飲み込んで神々を救ったが、そのためにその喉が青くなった。このことから「ニールカント」(青頸)はシヴァ神の別名となった。シヴァ神はその多様な性格から多くの別名を持つが、シャンカラ(恩恵を与えるもの)、シュイラ(棍棒を手にするもの)、ビナーカと呼ばれる棍棒を持つことからビナーカパーニ(ビナーカを手にするもの)、パフルーパ(多くの形を持つもの)、マハーヨーギン(偉大な修行者)、ヨーゲーシシュヴァアラ(修行者の主)の別名を持ち、虎の皮を身にまとい、蛇を首飾りや腕輪とする。また、ヒンドゥー教の聖典『リンガ・プラーナ』では三眼で千手千足を持つ姿で描かれる。これらの属性はみな大悲呪の中に取り込まれていることがわかる。このようなシヴァ神の属性が青頸觀音として仏教に受容されてきたのである。



その成立もヒンドゥー教のシヴァ神と深い関連を持つ。特に有名な乳海攪拌神話に登場するシヴァ神は、猛毒(ハロー)を飲み込んで神々を救ったが、そのためにその喉が青くなった。このことから「ニールカント」(青頸)はシヴァ神の別名となった。シヴァ神はその多様な性格から多くの別名を持つが、シャンカラ(恩恵を与えるもの)、シュイラ(棍棒を手にするもの)、ビナーカと呼ばれる棍棒を持つことからビナーカパーニ(ビナーカを手にするもの)、パフルーパ(多くの形を持つもの)、マハーヨーギン(偉大な修行者)、ヨーゲーシシュヴァアラ(修行者の主)の別名を持ち、虎の皮を身にまとい、蛇を首飾りや腕輪とする。また、ヒンドゥー教の聖典『リンガ・プラーナ』では三眼で千手千足を持つ姿で描かれる。これらの属性はみな大悲呪の中に取り込まれていることがわかる。このようなシヴァ神の属性が青頸觀音として仏教に受容されてきたのである。

また、仏教ではそれをヴィシヌ神として受容し、その尊像を曼荼羅に取り入れたらしい。その経緯ははっきりしないが、このようなインドの宗教との習合が觀音信仰成立の謎を解くカギであろう。ただし、仏教の觀音菩薩である以上、ヒンドゥー教の神々と異なる点があるはずである。たしかに『千手經』類には多くの功德が説かれており、この陀羅尼はヒンドゥー教とおなじように万能の功德である。しかし、觀音信仰は、觀世音菩薩を信仰する者の世俗的願望をかなえるだけではない。むしろ、彼らに菩提心をおこすこと、つまり菩提へ導くものなのである。このことを忘れてはならない。

	和訳	語句の註解
摩囉那囉 娑婆訶	死よ、人よ(猪の顔を持つものに)スヴァーハー!	「もうらーのーらー」は、マラ(mara摩囉)ナラ(nara那囉)で、「死よ!人よ!」とする。ただし、不空注(No.1111)や韓国写本では「囉囉賀穆佉去引也】、つまりヴァーハ・ムクハヤ(varaḥa-mukhāya猪の顔を持つもの)とする。猪(varāha)はヴィシヌ神の化身として知られるが、仏教ではこれをシヴァ神(觀自在)として受容する。春日版、敦煌写本系は「娑婆訶」を欠く。高麗藏系は前句と文節なし。
悉囉僧阿穆佉耶 娑婆訶	ライオンの顔を持つものにスヴァーハー!	「しら」(悉囉 sira)は、Naraの聞き違いによる誤写か。「すーおもぎゃーやー」(僧阿(=何)穆佉耶 simha-mukhāya)で、「ナラシムハ(narasimha人獅子)の顔を持つもの)となる。なお、ナラシムハはヴィシヌ神の四番目の化身。やはりここでは觀自在を意味する。不空訳(栴尾本)では「僧賀目佉野」つまり、シムハ・ムクハヤ(simhamukhāya)とする。
娑婆摩訶(阿)悉陀夜 娑婆訶	すべての偉大なる成就者にスヴァーハー!	「そば」(娑婆 sarva)、「もこ」(摩訶[阿] mahā)常用經典では「阿」は欠。「しどやー」(悉陀夜 siddhāya)で、「すべての偉大なる成就者に」(sarvamahāsiddhāya)となる。ただし、春日版、敦煌(スタイン本)は、「波(婆)摩訶悉陀夜」とし、不空注(No.1111)は「悉駄尾備也駄囉引也 娑囉賀」(siddhavidyādhārāya svāhā成就者の明呪を持つものに、幸いあれ)を加え、その後「鉢納麼賀娑移也」(padma-hastāya)「蓮華を手にするものに)とする。
者吉囉阿悉陀夜 娑婆訶	チャクラ(円輪)を手に持つものにスヴァーハー!	「しゃざー」(者吉囉)はインドラの武器チャクラ(cakra円盤、円輪)で、「おしどやーやー」(阿(=何)悉陀夜)は、ハスタ(hasta手)からなる複合語の与格で「チャクラ(円輪)を手にするものに」(cakrahastāya)という意味。変化觀音では円輪を持つのは、如意輪觀音の他、ほぼ千手觀音に限定される。ただし、不空注(No.1111)「斫訶囉摩駄也」、金剛智訳(No.1112)「者羯囉喩駄耶」、同(No.1061)「斫羯囉摩駄耶」とする系統もある。これは「チャクラで戦うものに」(cakrayuddhāya)である。ユツダ(yuddha)は、動詞√yudh(戦う、征服する)の過去分詞、または名詞で、「戦闘、戦い」の与格である。最後にスヴァーハー!
波陀摩羯悉哆夜 娑婆訶	蓮華を手にするものに スヴァーハー!	「ほども」(波陀摩)はPadma(padma蓮華)、「ぎゃしどやー」(羯悉哆夜)はハスタ(hasta手)の与格。不空注(No.1111)も、「鉢納麼賀娑移也」(padma-hastāya蓮華を手にするものに)とする。蓮華は觀音のシンボルである。しかし、春日版、敦煌写本系、高麗藏系、不空訳は「波(婆)摩羯悉哆夜」で、慈雲尊者版と韓国写本・不空注(No.1111)「賞佉攝娜頼胃駄曷也」(saṅkha-sābdane bodhanāya)は、「法螺貝の音で覚醒させる者に)とする。
那囉謹墀囉伽囉哪 娑婆訶	勇猛な最高の青頸(觀音)にスヴァーハー!	「のらきんじー」(那囉謹墀)は、ニールカント(nīlakaṅṭha青頸)で、「はーぎゃらやー」(囉伽囉哪)は「虎」、あるいは複合語の語末で「最高、勇猛な」の意味を持つヴィヤーグッラ(vyāghra)の与格で、この場合は「勇猛な青頸に」(nīlakaṅṭha-vyāghrāya)。
摩婆利勝羯囉夜 娑婆訶	強力なシャンカラ(觀自在)にスヴァーハー!	「もーほり」(摩婆利)は「強力な」という意味の「マハーバリ」(mahābali)、「しんぎゃらやー」(勝羯囉夜)はシヴァ神(觀自在)の別名シャンカラ(śaṅkara恩恵を与えるもの)の与格で、「強力な觀自在に」(mahābali-śaṅkarāya)
南無喝囉但那囉囉夜耶	〔仏法僧の〕三宝に帰依し奉る。	「なむか」(南無喝)は、ナマハ(namah)としているが、正しくは梵語の音韻の規則上、ナモ(南無 namo)となる。意味は「帰依する」。次に「らたんのーとらやー」と区切る。これはラトナトラヤーヤ(囉但那囉囉夜耶 ratna-trayāya)で「三宝に」である。
南無阿唎哪 娑囉吉帝 囉囉囉夜 娑婆訶	聖なる觀自在〔菩薩〕に帰依し奉る。スヴァーハー!	「なむおりやー」(南無阿唎哪)、「ぼりよきーちい」(娑囉吉帝)、「しふらーやー」(囉囉囉夜)と三区別するが、正しくは、「南無」(nama)と「阿唎哪娑囉吉帝囉囉囉夜」と二分すべきである。「おりやー」(阿唎哪)は、アーリヤ(ārya「聖なる」)という意味の形容詞なので、ナムオリヤー(南無阿唎哪)では切れない。「なむ」は梵語の音韻変化でナマ(nama南無)、「おりやーほりよきーちいしふらーやー」(阿唎哪。婆盧羯帝囉囉囉)はアーリヤーヴァロキテーシュヴァラーヤ(ārya-avalokiteśvarāya聖觀自在に)である。「そもこー」(娑婆訶 svāhā)は、不空訳(No.1113B)では「菩提 娑婆訶」(bodhi svāhā)「さとりよ、幸いあれ!」とする。
〔唵〕悉殿都漫哆囉鉢默耶 娑婆訶	〔オン〕成就せよ、真言の句にスヴァーハー!	伽梵達摩訳のみ冒頭に聖音「唵」(om)を加える。「してどー」(悉殿都)は動詞√sidh(成就する、達成する)の命令形シディヤントウ(sidhyantu)で「成就せよ」。「もどらーほどやー」(漫哆囉鉢默(=駄)耶)は、「真言の句」を意味するマントラパダ(mantrapada)の与格。それは、不空訳(No.1064)「悉殿都漫哆囉 跋駄耶」や、同注(No.1111)「悉鉤觀 滿恒囉跋那也」(眞言句願成就)「娑囉賀」でも確認できる。なお、春日版、敦煌写本類、高麗藏系、不空訳(No.1113B)はこの箇所は語句すべてを欠く。



ていきますから、私たちも実践した上で、真実の深みをお伝えすることをいつまでも忘れないようにしたいと思います。

私のところにも数々の悩みを抱えた方がお越しになりましたが、現代に蔓延する自己肯定感の低さは、自分ができることがたくさんあるのに見えなく、自分には変化する力もあることまで忘れてしまっているように感じます。自分に関する悩みや懸念をたくさん抱え込みながらも、自我が強かったりして、自分のことばかり考えてしまう傾向が見られます。そういう方にはできるだけ余計なものは捨ててしまい、解放されることを勧めます。まさに放下著です。

そういう人がお寺を何かを

求めているから、私たちも実践した上で、真実の深みをお伝えすることをいつまでも忘れないようにしたいと思います。

私のお寺は、住職の力量ひとつで大きく変わることがたくさんあります。早稲田の「自分にはこれができる」という事柄を見つけ、そして早く実践を開始することが大切ですね。また、始めてから続けることです。続けていくと、誰かが力を借してくることも多くなり、ますますから、継続は極めて重要です。

龍泉院の参禅会は、始まってから四十九年になりました。それまでも個別でお越しになり私と一緒に坐禅をご希望の方はいました。会という形でスタートして、初めは五〇年です。初めて会として開催したときの参加者は八名、過去に一度だけ一人も参加者がなく私ひとりです。それが今では多

は失念したので思い出した、またはこういう意味だったかと認識を改めたなどの感想もいただきました。

ご存知のように参同契は石頭希遷、宝鏡三昧は洞山良价が書いたもので、洞山良价は曹洞宗の起源となった人です。

ね。本のタイトルにはやさしく読む、と書いてありますが、これは元々雑誌『大法輪』の連載名でもあったので、中国の禅の時代背景や流れがわからないと、この本だけでは少しわかりにくく感じるところもあるかもしれません。ゆっくり何度かご覧いただくのがいいでしょう。僧侶たちだつて学びを繰り返して覚えることですから、ただこの本では、漢詩の解説をしてはいないもの、ただ言葉の理解というよりは、参同契、宝鏡三昧それぞれが生まれた歴史や思想的背景を示し、必然性にも思いを馳せられるように心がけました。

たとえば在家の皆さんにとつても、日々の暮らしで活かせる学びや視点がふくまれています。わかりやすいのは参同契が伝えている、差別をなくしてすべては平等であるという教えでしょうか。人間はどうしても、すぐに自分と他者を比較したりするものです。それによって生きづらく感じている方の救いにもなるかもしれません。本書の中では、「明」と「暗」について書かれた参同契の一部に触れ、禅門ならではの

いと四〇名ほどとなり、市外や県外からも通ってくださっています。また、長く続けているので、十数年前にお休みして以来今度は親子でまた参加くださる、なんて方もいますね。

会の皆さんの関係性もとても良いのです。代表幹事を務めてくださっている方はいますが、会費もなく、基本的には参禅会の日に置いてある募金箱に支えられています。それから会則らしいものもなく、あるとしたら「入会自由、退会自由の二つだけ」と受け入れています。どんな方でも笑って入れます。たとえば誰の学歴がどうか、どんな社会的地位がどうか、そういった話をする雰囲気はありません。本当に素晴らしいですね。

参禅会四十周年のときには、会の皆さんのご希望から坐禅堂を建設することにも至りました。それはとてもお金が掛かることですが、ある方が大きな金額を申し出てくださって、それに合わせて周りも進んだんです。おかげで大変素

今年には施食会も新型コロナウイルスのために縮小型で、法話なし、役員接待なし、お坊さんは四名だけでしたが、それでもいつも通りの儀式ができたのは参禅会からお手伝

先代住職だった父は、日本大学の宗教科で教員として勤めていたので、高田馬場の方にも家を借りていました。私はそこで生まれたので新宿区生まれです。東京で戦火が強まりそうな頃、母と姉妹と一緒に柏の家に疎開し、ここは焼けずに残りました。しかし育ちのいい母はこの田舎で百姓暮らしをしたことで体を弱くしてしまつたのでしよう。五十年代初めて亡くなりました。

十八歳で両親ともにいなかったのですが、一般的には苦労が多いように思われていたかもしれませんが、元来私は楽天家なのであまり苦労だとも考えられることはなかったです。登山が好きだったので、高校の頃は登山部、駒大では同好会を作りたくさん登山にも行きましたよ。東京で特にお世話になったのは高輪にある泉岳寺さんですが、そこでは小坂機融先生と兄弟のように親しくさせていただきました。昨年末に先生は他界されましたが私も五仏師の一人として葬儀に参加させていただき、若い頃は一緒に山に行つたことなどを懐かしみました。

これまで文化財調査や駒大の非常勤講師、本も著書や共著でできるだけ出すようにして、それらと並行して龍泉院の住職としては六十三年になります。それは何でも継続する意志の強さと、何より多くの皆さんのおかげだと感謝しています。

師 老 雄 宏 名 椎

インタビュー



聞き手 柳澤円

求めているから、私たちも実践した上で、真実の深みをお伝えすることをいつまでも忘れないようにしたいと思います。

私のお寺は、住職の力量ひとつで大きく変わることがたくさんあります。早稲田の「自分にはこれができる」という事柄を見つけ、そして早く実践を開始することが大切ですね。また、始めてから続けることです。続けていくと、誰かが力を借してくることも多くなり、ますますから、継続は極めて重要です。

龍泉院の参禅会は、始まってから四十九年になりました。それまでも個別でお越しになり私と一緒に坐禅をご希望の方はいました。会という形でスタートして、初めは五〇年です。初めて会として開催したときの参加者は八名、過去に一度だけ一人も参加者がなく私ひとりです。それが今では多

敵な坐禅堂ができました。参禅会による会報誌は三〇年以上続き、常に前よりもさらに良い会報を作りたいと意欲的です。歳末になると駅前で托鉢をなさつたり、市内の企業や大学の学園祭へ行つて出張坐禅を開催したりと、実に積極的に自発的に活動してくださっています。作務も積極的に務めてくださり、境内は作務の方々のおかげで草木の手入れが行き届いているようなものです。

外で作務をしてくださる方々がときどき、日当たりや風の通りが気持ちいい場所を見つけてテーブルと椅子を出してくるのでみんなでお茶を飲みます。人間は飲食を共にすると胸を開き、実に色んな話ができますから、そこでもまた懇親が深まるわけです。今年も色々な制限もありますが、三密を避けるなんていうのは考えてみる、非宗教的行為にも思えます。参禅会の方は私たちにとって、なくてはならない存在ですから。

先代住職だった父は、日本大学の宗教科で教員として勤めていたので、高田馬場の方にも家を借りていました。私はそこで生まれたので新宿区生まれです。東京で戦火が強まりそうな頃、母と姉妹と一緒に柏の家に疎開し、ここは焼けずに残りました。しかし育ちのいい母はこの田舎で百姓暮らしをしたことで体を弱くしてしまつたのでしよう。五十年代初めて亡くなりました。

十八歳で両親ともにいなかったのですが、一般的には苦労が多いように思われていたかもしれませんが、元来私は楽天家なのであまり苦労だとも考えられることはなかったです。登山が好きだったので、高校の頃は登山部、駒大では同好会を作りたくさん登山にも行きましたよ。東京で特にお世話になったのは高輪にある泉岳寺さんですが、そこでは小坂機融先生と兄弟のように親しくさせていただきました。昨年末に先生は他界されましたが私も五仏師の一人として葬儀に参加させていただき、若い頃は一緒に山に行つたことなどを懐かしみました。

今年には施食会も新型コロナウイルスのために縮小型で、法話なし、役員接待なし、お坊さんは四名だけでしたが、それでもいつも通りの儀式ができたのは参禅会からお手伝

敵な坐禅堂ができました。参禅会による会報誌は三〇年以上続き、常に前よりもさらに良い会報を作りたいと意欲的です。歳末になると駅前で托鉢をなさつたり、市内の企業や大学の学園祭へ行つて出張坐禅を開催したりと、実に積極的に自発的に活動してくださっています。作務も積極的に務めてくださり、境内は作務の方々のおかげで草木の手入れが行き届いているようなものです。

外で作務をしてくださる方々がときどき、日当たりや風の通りが気持ちいい場所を見つけてテーブルと椅子を出してくるのでみんなでお茶を飲みます。人間は飲食を共にすると胸を開き、実に色んな話ができますから、そこでもまた懇親が深まるわけです。今年も色々な制限もありますが、三密を避けるなんていうのは考えてみる、非宗教的行為にも思えます。参禅会の方は私たちにとって、なくてはならない存在ですから。

先代住職だった父は、日本大学の宗教科で教員として勤めていたので、高田馬場の方にも家を借りていました。私はそこで生まれたので新宿区生まれです。東京で戦火が強まりそうな頃、母と姉妹と一緒に柏の家に疎開し、ここは焼けずに残りました。しかし育ちのいい母はこの田舎で百姓暮らしをしたことで体を弱くしてしまつたのでしよう。五十年代初めて亡くなりました。

十八歳で両親ともにいなかったのですが、一般的には苦労が多いように思われていたかもしれませんが、元来私は楽天家なのであまり苦労だとも考えられることはなかったです。登山が好きだったので、高校の頃は登山部、駒大では同好会を作りたくさん登山にも行きましたよ。東京で特にお世話になったのは高輪にある泉岳寺さんですが、そこでは小坂機融先生と兄弟のように親しくさせていただきました。昨年末に先生は他界されましたが私も五仏師の一人として葬儀に参加させていただき、若い頃は一緒に山に行つたことなどを懐かしみました。

今年には施食会も新型コロナウイルスのために縮小型で、法話なし、役員接待なし、お坊さんは四名だけでしたが、それでもいつも通りの儀式ができたのは参禅会からお手伝

「二〇一八年に上梓された『やさしく読む参同契・宝鏡三昧』に関し、参同契と宝鏡三昧への思いをお聞かせください。

参同契も宝鏡三昧も、曹洞宗門においては毎朝日常的に唱えているお経です。毎朝の読誦で暗記し、伝統として重んじられてきました。いずれも、「人間はそれぞれが創造的で、将来に希望をもって生きるべき存在である」と説かれた偈頌です。曹洞宗門にあつては至極当たり前のことをまとめた本だと思われれるかもしれませんが、龍泉院の参禅会(坐禅会)で参同契の話をしたところ、終わった後で参同契とはどんなものかという質問が出ました。確かに在家の皆さんにとつては親しみの機会もありませんが、ただ読んだだけでは分かりにくい漢詩です。何か適した解説書はないかと参禅会の代表幹事さんから相談され、結論として、以前私が雑誌『大法輪』で連載していた内容を修正・加筆する形で本にしました。特に宝鏡三昧の方は、もう十数年前に出版社の方から「適当な現代語訳がないから書いて欲しい」という相談を受けて書いたものでしたので、そこに参同契の解説もまとめて一冊にしました。

平成二十八年は参禅会の四十五周年記念ということで、実際にはそれから少し後になりましたが形にできてよかったと思つています。参禅会にいらしている方々からも、漢詩の解説が参考になったと言つて喜んでくれました。また、

ね。本のタイトルにはやさしく読む、と書いてありますが、これは元々雑誌『大法輪』の連載名でもあったので、中国の禅の時代背景や流れがわからないと、この本だけでは少しわかりにくく感じるところもあるかもしれません。ゆっくり何度かご覧いただくのがいいでしょう。僧侶たちだつて学びを繰り返して覚えることですから、ただこの本では、漢詩の解説をしてはいないもの、ただ言葉の理解というよりは、参同契、宝鏡三昧それぞれが生まれた歴史や思想的背景を示し、必然性にも思いを馳せられるように心がけました。

たとえば在家の皆さんにとつても、日々の暮らしで活かせる学びや視点がふくまれています。わかりやすいのは参同契が伝えている、差別をなくしてすべては平等であるという教えでしょうか。人間はどうしても、すぐに自分と他者を比較したりするものです。それによって生きづらく感じている方の救いにもなるかもしれません。本書の中では、「明」と「暗」について書かれた参同契の一部に触れ、禅門ならではの

今コロナ禍となつた社会における仏教、とりわけ僧侶の存在意義についてはどうにお考えですか。

あらためて祈りの力を伝えること、そして自らも実践をすることを怠つてはいけません。その昔、日本では何人も天然痘に苦しむ、その度に人々は必死に神仏に手を合わせてきました。宗教家も多くの時間を祈りや坐禅に費やして向き合つたと思いますし、どうかお救いください、どうかご加護を、と八百万の

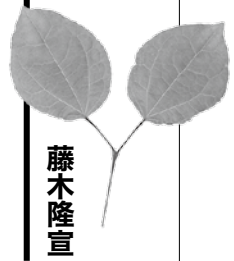
でも、涙が出るほど本質的なことを、そして日々実践する大切さをお伝えしています。手を合わせて礼拝を続けることで、祈りは本物になつていくので、祈りには本物の

宗教的行為です。私は法事のときも必ず、その場にいる方々に全員で手を合わせてもらうようにしています。そして最後にお話をするときには、難しい話は一切しません、自分が実際に体験したことを話すほうが皆さん聞いてくださるからです。心から祈つて、そして耳にした真実の話は記憶に残るじゃないですか。体験したことの中

宗教的行為です。私は法事のときも必ず、その場にいる方々に全員で手を合わせてもらうようにしています。そして最後にお話をするときには、難しい話は一切しません、自分が実際に体験したことを話すほうが皆さん聞いてくださるからです。心から祈つて、そして耳にした真実の話は記憶に残るじゃないですか。体験したことの中



編集後記



藤木隆宣

十一月一日の第五十二回全日本大学駅伝では久しぶりに涙がこみ上げてきた。三強と言われながらも大方の予測は青学、東海、駒大であったのが大会新の優勝。全国津々浦々でテレビ、ラジオで見聞きされたと思いますが、田沢選手のラストスパートは見事だった。この時涙が自然と込み上げてきた。やはり母校には愛着があるのだと思った。

椎名宏雄老師の坐禅会はすごいですね。継続だけでなく出張坐禅会もされたとは恐れ入ります。実に学ぶべきことが多い内容です。大本山永平寺の貫首猊下が九月二十九日に交代された。新貫首南澤道人禪師は宮崎奕保禪師より一つ年上で猊座に御坐りになられたようです。七十六歳の私にとりましてはそこまで生きられるかどうかの御年ですが、永平寺は世界の禅道場の中心です。このところ禅仏教からの発信が少ない事に残念な思いを持って一人です。新体制になられ身近なところにおられる雲水さんや宗門、日本の仏教界に新鮮な空気を発信して頂きたいと願うものです。今後の世界は仏教の世界観への期待があります。供養仏教と合わせてコロナ禍の中の仏教徒の立ち位置をしっかりと示す必要があり。でないといと日本の中での存在感がどんどん薄れて参ります。また宗門では人

材育成が叫ばれて久しいのですが、全くその体制にならない体質があります。とても残年なことです。人材と申しますと、次世代を担っていくお子さんたちを預かる施設にとっても、厳しい状況が続いています。ここで私の関係している保育園と児童養護施設から見えてくる問題点を皆様と考えてみたいと思います。私が理事長を務める社会福祉法人輝雲会では、福井県越前町で「たいら保育園」、神奈川県相模原市南区で「あおいそら保育園」を運営しています。それぞれに園長がいて責任をもって子どもの発達を支援する内容の保育をしています。現在は都会地では保育園が足りず待機児童を抱える地域もありですが、地方の多くは少子化でどの保育園も子ども集めて四苦八苦ではないでしょうか。マスコミは待機児童のことだけを取り上げますが、たいら保育園は少子化の波をもろに受けています。保育内容で地域の支持を受けて何とか頑張っている状態です。あおいそら保育園は待機児童の多い地域です。保育内容は全国の保育園にほぼ任せられています。それぞれの保育園では年齢に応じた園児の発達を支援するために保育士さんたちが日々頑張っています。問題は保育の内

容です。保育士さんたちは保育士の資格を取るために短大、専門学校で学び資格を得ますが、一年齢に応じた保育とは」を各大学、専門学校でもっと追及していただきたいものです。小、中学校は義務教育です。各学年に教科ごとの教科書があり問題点はいろいろありながらも学ぶ視点が示されています。曹洞宗は寺院の数も多く保育園、幼稚園を運営しておられるご寺院も多く保育内容についてどうお考えかお聞きしてみたいものです。児童養護施設『手まり学園』を始めて十二年になります。平成二十一年に県からの要請もありスタートしましたが、今でも子どもの支援に関しては問題点が山積みです。児童養護施設は現在全国に六〇〇ヶ所あり三万人の子どもが生活しています。手まり学園でも毎年平均四〇人が生活しています。いずれも家庭の中での養育環境が整わない児童です。コロナ禍の中では虐待が増えています。神奈川県の子どもの状態の待機児童はいつも満杯の状態のようです。悲惨な虐待報道には関係者の一人として心が痛みます。十一月三日に手まり学園を卒業したMさんが我が家へ泊りました。Mさんが我が家へ泊りました。専門学校を出たが病気で職が定まらず、社会に一步踏み出せないでいるのです。とても頭のいい子で対等以上の議論ができるのですが、体が付いていけずいます。児童養護施設の職員は大卒

曹洞禅グラフ 2021春・彼岸号特集予告 2021年2月10日 発行予定
参加者 | 有馬嘉男 (NHKニュースウォッチ9キャスター) 石澤良昭 (元上智大学学長) 三部義道 (SVA副会長) 司会 | 藤木隆宣
県談 コロナ禍のいま 日本仏教は何を担い得るのか

手まり学園 寄附者御芳名 R2.8.6~R2.10.31
所在地 寺院名(個人名) 金額
東京都 砂金智佐(105) 3,000
神奈川県 青木義次(86) 9,000
東京都 砂金智佐(106) 3,000
東京都 砂金智佐(107) 3,000
神奈川県 青木義次(87) 9,000
佐賀県 朝元寺 5,000
東京都 砂金智佐(108) 3,000
東京都 砂金智佐(109) 3,000
合計 38,000

てまり学園にご支援をいただき誠にありがとうございます。



写真体験をしました(相模原市緑区 日庭寺にて)

仏教企画発行の刊行物 (*部数により割引があります) すべて税別価格です
『修証義』解説 丸山劫外著 1,400円★
『うたい継ごうよ、子守唄』 長田暁二・西館好子共著 1,200円★
『まんが問答一期一話』 文平和宏昭 まんが垣内敬遠 1,200円★
『葬送のしおり』 長井龍道著 30円
修証義読本『生老病死』 須田道輝著 500円★
『曹洞宗檀信徒經典』 須田道輝解説 300円★
曹洞宗檀信徒必読『供養のすべて』 靈元文法著 140円★
曹洞宗檀信徒必読『葬儀のすべて』 靈元文法著 150円★
随想集 玉崎千鶴子 その永遠の世界を探って 500円

お申込み 〒252-0116 神奈川県相模原市緑区城山4-2-5 ※住所・FAX番号がかわりました TEL: 042-703-8641 FAX: 042-782-5117 Email: fujiki@water.ocn.ne.jp
仏教企画 ※ご寺院名後の番号(3桁もしくは4桁)がお客番号(コード)になります。お申込みは ①ご寺院名 ②お客番号 ③電話番号でも可能です。